

浄

monthly
jōdo

土

February · March 2003

2.3



月刊

浄土

もうすぐ

800号

昭和10年5月に産声をあげた月刊誌『浄土』は現在、通算で780号を越えました。古い資料を整理し、正確な号数を調査中ですが、平成16年には通算800号を発行することになります。

そこでこの頁では懐しの『浄土』表紙ライブラリー」など、さまざまな企画をお届けする予定です。

法然上人顕仰会

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

神奈川・座間

宗仲寺

宗仲寺第二十五世平野仁司住職(左)、右はご子息の誠司副住職。そして中央がお孫さんの奨くん。下は落慶を迎える山門。左奥が本堂。





本堂内陣と本尊阿弥陀如来坐像。

だれでも入れる喫茶室がホール横にあり、壁には美術、特に絵画が好きな住職のコレクションが飾られている。





徳川家康と縁の深い宗仲寺の寺宝、徳川家康公御真影（右）と家康公愛用の茶道具一式（上）。



もと霊屋の欄間には家康公が好きだった鷹狩りの様子が彫られている。現在は本堂の欄間になっている。



宗仲寺本堂。昭和五十年に建てられた。



ライトアップされる灯籠。この道の第一人者三橋國民氏作で、いずれは池を掘る予定だという。



入り口脇の土足の応接間。靴をぬがず、すむので多くの人が立ち寄り、何よりの憩いの場になるという。



穏和ながらも芯の通っている平野仁司住職。



相模川と正面奥が丹沢連峰の大山。大山詣で、座間にもぎわったという。

浄土

2003/2・3月号 目次

巻頭カラー 寺院紀行 神奈川・座間 宗仲寺	 撮影=タカオカ邦彦	1
子育てについて思うこと	 安井昭雄	6
寺院紀行 神奈川・座間 宗仲寺	 真山 剛	14
表紙のことば	 永井健策	23
春彼岸会法話	 羽田恵三	24
響流十方	 袖山榮輝	30
食と健康	 長田英樹	34
民話をたずねて	 石崎敬子〈絵石川忠夫〉	36
Jフォーラム		43
ネット俳句の楽しみ	 村田恭子	48
浄土誌上句会	 選者=増田河郎子	48
漫画で楽しい仏教用語	 藤井ひろし	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

子育て について 思うこと

安井昭雄

浄土宗保育協会副理事長

(1)

現今の子どもは私どもの幼年時代と違っているとよく言われるが、私から見ると同じようなところもあれば違っている点もある。例えば、一番違うのは子どもを取り巻く環境に關してである。よい面がある一方、自然環境の減少と、テレビ等のどぎつい映像など、子どもには好ましいと思えない場面も多くあり、私どもはこの長短両方を体験的に知っているだけに、何かの機会に私なりに纏めておきたいと思つていたところである。これも仏縁といえるだろう。(合掌)

さて、いつの時代でも、子どもは良い環境の中で育つように、と願つて育てられるものであるが、子どもにとっては環境の善し悪しは受け身的なものだから、周囲の大人が判断して、直すべきところは改善しなければいけないものである。賛否両論いろいろあるわけだから、そこで原点に立つて、先ず考えられることは、「心身共に健康に育つように」ということを保護者、殊に両親は、中心に置くべきだと思ふし、その他の色々な考えもこの中心的基础の上に構築されていくべき話になるのではないかと思う。そこで、ここでは「心」の方を主として検討していきたいが、幼児の場合は「身」の方にも重要な意味があるので、こちらの方を先に少し触れておこう。筆者が病弱な身体に生まれ育つただけに、その重要性は身を以て知っているからである。

(2)

身体は健康である方がよい。健康であれば何か困難なことに遭遇した場合に感ずることは、体力があるということは大変有り難い、ということである。いわゆる「無理がきく」ことはよいことであつて、たとえ病氣になつても健康な子は「回復」が早い。欠点としては、自分自身の健康を過信して体を壊してしまうこともある。ただ、健康であれば色々なことに前向きに進んでいけるので、人生経験もプラスに向かつて取り組んでいける可能性が高い。しかし反面、病身の人のデリカシーで複雑な思いを余り感じてもらえないこともあるのではないだろうか。いわゆる弱い者の立場に立つてもものが考えられない可能性がある。学校でいじめられるタイプの子は応々にして弱い子が多いものである。ただ一般には、風邪やけがを誰でも少しは体験しているものだから、健康の有り難さを実感しているだろうし、自分の健康のための自制はそれなりにしているものではある。幼少時は先ず身体的な健康を第一に考えていくことを推めたい。

(3)

次に「心」の方であるが、これはなかなか難しい。人間の心の中には当為（義務・責任感など）と利己的な欲望（利害・損得や、怠けなど）があつて、その間に立つて、自分の気持ちどちらを優位にして判断し実行に移すかということを行なっている。お釈迦様は

この「煩惱」を心の問題の中心に据えて考えられたのであり、その煩惱を消すことを生涯説き続けられたわけである。この煩惱は、要は「苦勞したくない」「樂して得したい」などという自己本位の考えからでた行為の中に多く見られる。今の園児たちを見てみると、すぐに「疲れた」「やりたくない」「(先生)やって」という言葉が少なくない。ただ、これは、幼児の場合、中には先生を母親のように感じ、甘えたいという気持ちもあるから、一概に禁止や拒否をするべきではないのであって、上手に受け止めた上で、その子に自分でやってみるよう励ましながら、よい方向へ仕向けるという方法が一番良いと考えられる。同じ幼児の指導方法でも年少児と年長児とはかなり違うが、それでも先生が「その子の立場に沿って良い方向に仕向けていく」ということは必要である。そしてその方向を見つけ出すのも、行うのも、それから生ずる結果も、子ども自身が考え、実行し、責任をとる(選んで実行したのは自分である、ということに気づかせる)ということを含めて、その子どもに体験させることである。そして、結果的にミスがあれば次には失敗しないように、どこに問題点があったのか等を子ども自身に気づかせる。そうでないと、自分の失敗を何でも他人のせいにする性癖のある人間をつくってしまうことになる。

(4)

もう一つ、現代の家庭と以前のそれとの違いで、家の構造が和風から洋風になったことで、例えば、座席が座布団でなく、椅子になったことからくる長所・短所がある。それは、

思い立てばすぐ活動できることはよいことなのだが、反面、落ち着いて聴いたり、考えたりしなくなった点が気に掛かるのである。ものを突き詰めて「沈思黙考」する場合、時には座布団に坐ることによって静かに聞いたり深く考えするという習慣をつけることは大切なことであると思う。そこで当園では、園児たちがあまりにも落ち着いては先生の話を聞かないので、数年前からホールでの集会の時には、各自の座布団を持参して、その上に正座するようにした。集会なので合掌・黙想、讃仏歌や先生の諸注意など五、六分行うわけであるが、初めは騒いでいた数人の常連も、次第に静かに聴くようになった。子どもでもシーンとして合掌・黙想することの心地よさを感じているようである。お話が長くなるような場合は足を崩すことを促すが、この心地よさを体感し続けると、小学校へ行っても先生の話を、椅子に座ってでも、静かに聴ける子になる。仏教保育の「合掌聞法」という四月の徳目の配置は、教育の最初期に優先的に身につけさせる必要性の理に適っている。この点、仏教保育を柱にしている保育施設は、こうした式典を通して静寂の快さを子どもたちに身につけさせることが出来る。元氣だけが子どもにとってよいことなのではないし、先生方や保護者も「元氣」と「騒ぎ」を取り違えないようにして欲しい。「場の状況」を子どもでも弁える習慣をつけることである。そのお手本は、先生の表情や所作である。先生の動作・仕草を真似る、その真似につられて、さらにそれを真似る子が増える。中には先生の口調で友達を注意する子も出てくる。その先生が好きであれば、なおさら真似る子が増える。特に女兒に著しい。

これについては昨年の体験であるが、私が近くの小学校の入学式にお祝いに行ったときのことである。新一年生が入場し、椅子に着席した。と、その児童たちの中で直ちに足をブラブラさせ始めた子が数人いた。さらに、中には大あくびをする男の子がいた。五分とたたない内に、顔に見覚えのない子の殆どは全員足をぶらつかせていた。校長先生の歓迎のご挨拶の時にはその動きは凄まじかった。そのような中、足を動かさないでジーっと聴いている子の顔を追ってみると、全員我が園の卒園生だった。私はホッと且つ自信をもって帰路につくことが出来たのである。この子どもたちは先生の話をジーっと聴くことに慣れているから、いつものように聴いたままでのことである。このまま続いてくれることを願わずにはいられなかった。

(5)

ところで、以前、東京では石原都知事が心の東京改革を大きく説かれたことがあった。その中で、「叱ること」をスローガンの一つに挙げられていた。「叱る」ということは「怒る」ことと違ってなかなか難しい。怒ることは感情的に怒ればいいわけであるが、叱ることは、その相手の為をよく考えた上で注意をしてくれるということであって、言葉の「愛のムチ」といったものが相手に通じないと意味はない。もつとも、現今ではその積りで叱っても、叱られている人が「怒られた」としか受け取ってもらえないことも少なくないばかりか、さらに逆切れされたりして、とんだとばっちりを喰らうこともある。従って誰も叱

らなくなってしまうような風潮になってしまった。その点、保育所や幼稚園等では幼児には、声を荒げずに、きちんと叱っていける数少ない教育の場である。

しかし、叱ることよりもっとよい方法は「褒めること」である。大人でも褒められればいい気持ちになるから、子どもならなおさらのことである。ましてや好きな先生から褒められれば天にも昇った良い気分になり、この先生の言うことなら何でも聞こう、という気持ちにすらなるのである。ということは、実は大人の場合でも同じ傾向があり、家庭はもとより集団の中での「人間関係」が基本的にとても大切になってくるわけである。（ただ、大人の場合はこの関係が非常に複雑になるので実に難しいのである。）だから、少なくとも人生での広義の対人関係の基本ルール、則ち、「他人の話をよく聴く習慣をつけること」を、先ず子どもの時分から身につけさせたい、と思うのである。

(6)

次にこの対人関係のルールを教える幼児向けの教材にはどのようなものがあるだろうか。私の体験上、一番良いと思うものは、民話・昔話とそれを題材にした紙芝居や人形劇などである。紙芝居や人形劇などを嫌いな子どもはほとんどいないであろう。登場人物の性格が明確なので、視聴している幼児にも充分に理解できるのである。ただ、中には好ましくないとと思われる民話もあるので、よくそのストーリーを吟味して、幼児に適したものを選ぶ必要があることはいうまでもない。考えてみれば、このことを私は四十年前からやつ

てきたのであるが、研究すればするほど、奥が深く、且つ広いことを身をもって知ってきたわけである。若い頃はいろいろ迷い、悩んだが、今ではこの道を選んでよかった、と実感している。

(7)

最後に、学校の成績だけで人間の格付けをしてしまう風潮はやはり改めなければならぬと思う。しかも単純な二分法で、成績がよい人間は、頭がよくてよい人間、成績の悪い人間は人物も悪い、という風潮を改めてもらいたい。所謂、頭がよくても素行が悪かったり、品性の欠ける人も少なからずいる。学校の成績で全てが決まるような風潮は決してよいとは言えない。その点を考慮してか、近年では、学校で奉仕活動や職場実習を授業の中に採り入れるようになってきたが、点数にも加算したり、または人物評価にも反映するようには是非もつと考慮して頂きたい。しかし、また翻つて考えてみると、本当の人物評価は他人から受けるものではなく、最終的には自分がするものである。それにしても街を歩けば行く先々で「羞恥心」がなくなってきたな、と感ずる場面が所かまわず、やたらと目につくようになったのは、衣食が足りているのに、どうしたことであろうか。自分を客観視できるかどうか、大人であるか否かという目安になるのである。それなら先ずは、最も身近な、我が身から始めるのがよいことになる。そこで、私にとつては、行動し、実践しつつ、念仏して、生活していくのが、最善の生き方である、と私は考えている。

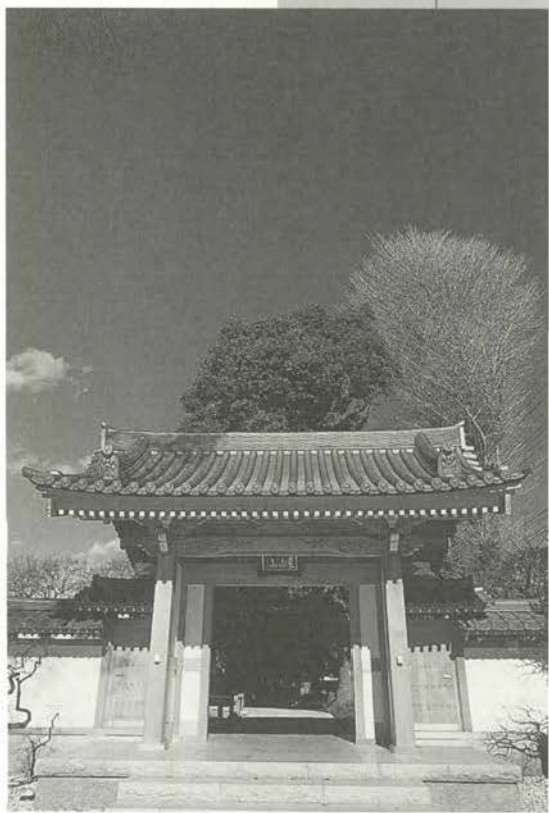
寺院紀行

神奈川・座間

宗仲寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山 剛



宗仲寺山門。本堂までのアプローチを長くとった山門の位置は住職の工夫のひとつである。

プシュツ、勢いよく缶ビールが開く。その音につられ、次々と缶ビール、缶ジュースが開けられる。ところは集会所、そこには近隣から二十人を越える人たちが集まっている。右奥に座っているおじいさんの御礼のような一言から始まった。

「お寺へいくのはどうも億劫でいかん、第一敷居が高くて。こうやって住職に来てもらえると、何でも話せ、ありがたい。」

すると、奥に座っていたおばあさんが続ける。

「わたしは一人暮らしで、いざという時の葬儀はどうしたらいいのかわからん。今のうちにいろいろ聞かせといてくれないかね。」

神奈川県座間にある宗仲寺の平野仁司住職は十数年前からこうした檀信徒との交流の場を設けている。

「三年に一度程ですが、檀信徒三十軒ぐらいをひとつのグループにわけて、その周辺の集会所などで午後七時半から約二時間、みなさんから包み隠しのない意見を聞かせてもらっているのです。」

お寺から一人三百円の予算で飲み物とおつまみを用意します。そしていろいろなことを自由に話し合う。いわば、地区懇談会ですね。七時半からという時間は、もし、お通夜が入っても間に合う時間だからです。」

この地区懇談会、住職がお寺から出て、檀信徒の中へ飛び込んでいくのがいい。檀信徒側にとっては一回だが、十四力所を回る住職



宗仲寺を建立した内藤家のかつての陣屋跡に残るお稲荷さん。宗仲寺の裏手にある。

にとつては二、三か月にわたる仕事、なかなかできるものではない。

一般的に、お坊さんが檀信徒の方に足を運ぶのはお葬式と年忌法要、そしてお盆、あるいはお彼岸？ 他にもあるのだろうか、どういう時にしてもお経を上げに行くのが目的だろう。もちろんそうした後席と一緒にテーブルを囲むこともあるだろうが、おそらく、お坊さんは上座に奉られてしまうに違いない。

しかし、この地区懇談会はちよつと違う。まず、お経がない、住職もお坊さん姿ではない。そして檀信徒がみんなそろって自分たちのホームグラウンドに住職を迎えるのである。だから、気楽に話ができるし本音も言える。もちろん檀信徒だけでもない。住職も困っていることや、行事などの相談もできる。

「やはり、最初は緊張していますから、まず私が缶ビールを開けることにはなるのです。でも誰彼となく話し始めれば、あとは二時間があつと言う間に過ぎてしまいますよ(笑)」

この連載を持たせていただいてはや七年が過ぎ、取材させていただいたお寺も八十を越えた。しかし、こうした形のお寺と檀信徒との触れ合いの話を聞くことは初めてのことだ。

重ねてきた取材のおかげで、だいぶお坊さんに慣れさせてもらつたが、やはりわれわれ一般人から見ると、お坊さんには声がかけにくい。衣を着ていると、違う世界の人であり、何かと気を遣うし、



客殿裏手の庭に残る銅鈴灯籠は、座間市の指定遺跡だ。

気軽に話せないというのが偽らざる本音だ。

そうした日頃の思いもあるせいか、今回の平野住職のこの地域懇談会には驚きとともに感動した。こんな会がどのお寺にもあつたら……、と思うのは私だけだろうか？

さて、この宗仲寺、神奈川の古刹の一つで、その源を探ると平安時代頃に創建された天台宗寺院、良真院に遡るという。そして鎌倉時代には御家人渋谷氏が道場として再興するも室町時代の戦火で焼失、以来小さいお堂として続いてきた。そのお堂を浄土宗寺院として建立し直したのが、戦国武将の内藤清成である。時に一六〇三年、江戸開府と時を同じくする慶長八年のことだ。

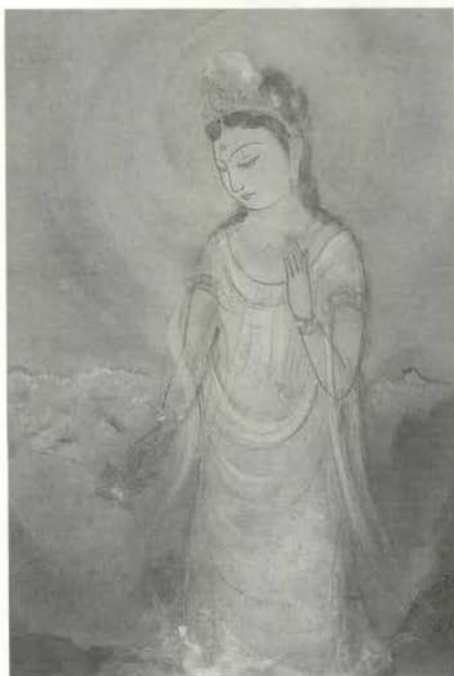
この内藤清成、家康の側近として重用され関東総奉行にまで出世するのだが、この座間の地を拝領し、後に内藤新宿、現在の新宿を下屋敷とした。そして、最後は長野県の高遠に転封した内藤家の祖の一人である。

この内藤清成は、この座間並びに周辺の六か村を家康から拝領したが、唯一宿と名のついた座間の地に屋敷を構えた。その屋敷跡は隣接の相模原市に陣屋小路として残っていて、陣屋稲荷と記された小さな祠がたたずんでいる。ちょうど宗仲寺の裏手の小高い丘にあたるが、清成はその屋敷から、遠くは丹沢の霊峰大山を、足下には相模川の流れを望んでいたに違いない。



宗仲寺に隣接する座間幼稚園。仁司住職のあとをついで、現在は副住職が園長を務めている。

徳川家康公の木像。もちろん宗仲寺の大切な寺宝のひとつだ。



近藤弘明氏の「観音菩薩」。住職の好きな絵の一枚。

この丘をさらに見下ろす場所に、座間八景のひとつ「夕映えの丘」の碑が立つ座間神社がある。遠く神代に創建されたこの神社の裏手は、現在米軍のキャンプ地で、座間キャンプと呼ばれる米陸軍司令部の基地である。古代の神社に中世の名刹、そして現代の基地が相模川を挟んで丹沢連峰と相對しているのだ。

さて、この清成が建立した宗仲寺の正式名称は、来迎山峯月院宗仲寺。実は清成はわけあって内藤忠政の養子に入っていて、寺号は清成の実父、竹田宗仲の名からとっている。清成は三河の岡崎生まれで、家康と同郷ということもあり、小姓の頃から家康に可愛がられていた。また、宗仲寺開山の源榮上人のことも家康は以前より知っていることもあり、鷹狩りの際に何度か宗仲寺に寄っている。しかも、この源榮上人も一説には三河大樹寺の天室上人の甥ともいわれ、宗仲寺の住職を務めた後、大樹寺の住職になっている。

こうした三者を結ぶ三河との浅からぬ縁からか、宗仲寺は家康から多くの品々を授かっている。宗仲寺は明治初頭に焼失しているものの、そうした品々は寺宝としていまも残っている。巻頭のカラーページで紹介しているが、いずれも逸品である。また、こうした家康との縁を今に伝えるのが、現在の本堂内陣の鷹の彫られた欄間で、かつては家康公の位牌を安置する霊屋の欄間だった。

平野住職はこうした品々をお寺にお参りに来る人たちの目に触れ

る場所に飾っている。貴重な品々だけに奥にしまいがちだが、お寺を檀信徒に限らず多くの人たちとの交流の場と考える住職にとって、こうした寺宝も大切なメッセージのひとつなのである。

さて、この三月二十七日、宗仲寺にとって大きな行事が控えている。開創四百年の記念式典、並びにそれに合わせた山門の落慶式典、山門から本堂に至る参道、灯籠のお披露目である。

「浄土宗開宗八百年に合わせ、昭和五十年にいまの本堂の落慶をしました。昭和四十三年に住職となつてからの最初の大事業で、雨漏りする本堂を建て直すか、補修に止めるか。いや、随分悩みました。夢枕に立った父である先代の『寺の為の事業だ、迷うことはない』の一声で腹が決まったのを昨日のことに覚えています。今回の開創四百年と山門、参道、境内整備は今年で住職歴三十五年になる私のお寺の理想像の結実でもあります。」

この記念式典にあたっては、財務、式典、境内整備と三つの部を作り、その部長を総代や世話人になつてもらいながら進めて来ている。宗仲寺は必ず檀信徒参加型で事を進める。

また、宗仲寺には総代世話人会を含めると、全部で十三のサークルがある。耕心塾という、寺報と同じ名前の勉強サークルは、四コマ一テーマで講師にお話いただく本格的な連続講演会。十九日に開かれるトークの会。宗仲寺ホールや画廊喫茶をギャラリーとして企



水子の霊を安置する観音堂。観音像は大船観音で知られる文化功労者、山本豊市氏の手によるものだ。



画展を開く宗美会。かつての金剛流から吉水流に変わった詠唱の杏詠会。皇后陛下より御内務金を賜るなど、大正から始まった託児施設としての流れを汲む座間幼稚園や土曜教園。その子供たちの成人を祝う、つどいの会。そして、法話を聞く法聴会や日曜日朝の勤行をする宗朝会、各種仏教行事。『耕心』という寺報を拝見して、サークルの多さ、活動の多さ、行事の多さに目を見張るばかりである。

こうした普段の活動の他にも、今回の境内整備後に地域の太極拳サークルから境内の使用を申し込まれ、百五十人が太極拳を楽しんだ。子供たちが気兼ね無く遊べる境内に、という住職の願いがまた新しい縁を結び、広がっていく。冒頭でお寺の外での活動に驚かされたが、お寺の中での活動もこれまた驚かされる。

こうしたお寺と檀信徒、地元の人々との密接な交流を支える秘密のひとつに現在帳がある。

「三年に一回程度、檀信徒から提出いただくもので、『檀信徒名簿』と呼んでいます。常に変化していく檀信徒の家族構成を知る大切な資料になっています。

一対一の寄り添い、これを私は接化と言っているのですが、やはり相手の家のことを知ることから始まると思います。」

地元の高校を出て大正大学に入学、児童教化にも携わってきた住職は、託児所から幼稚園となってきた宗仲寺の幼稚園園長を経て住



本堂正面の香炉。これも三橋國民氏によるもので、古く見える工夫がされている。

職になっている。同時に若い頃から教育委員会を始め多くの役職についてきた。また、鎌倉にある本山にも勤務し、現在は浄土宗の宗会議員も務めている。寺報の最終面に「住職動向」という欄があるが、まさに東奔西走の毎日だ。

そんな住職に夢を聞いてみた。

「今度の開創四百年と山門落慶で一段落したあとは、そうですね、好きな絵画や寺宝等を展示できる小さな美術館が作りたいですね。幸いと言っているのか、ここ座間にはそうした施設がまだないものですから、みなさんにも喜んでもらえますしね。」

若い頃、お寺の手伝いで少しずつ買い集めた絵を見せてもらったが、誰でも知っている有名な画家も少なくなかった。文化勲章も受章された洋画壇の重鎮、故林武画伯の著書『美に生きる』を読んで美術に惹かれるようになったとのことだが、美術品と接することで養われた感性が伽藍のあちこちに見受けられる。

いま、一番お気に入りの場所は表玄関脇の土足で入れる応接間だそう。お寺に来た方が気軽に入って雑談していく。そんな気軽さが気に入っているという。今日も平野住職は東奔西走の間を縫ってこの小さな応接間で接化しているに違いない。

(ルポライター)



本堂裏手には母と子の彫刻苑公園が広がっている。

空

心象書道

永井健策

さあ、これから皆様に作品を見ていただけるという昨年11月に、脳出血を患ってしまいました。今もリハビリ中ですが、「助けられて生きる」ということを、こんなにも感じたことはありません。

今まで以上に生きている、そして生かされていると日々感じています。本当にみなさま、ありがとうございます。

こうした貴重な経験も踏まえ、これからこの表紙のことはをつづってみたいと思います。先ずは一月号の「無」。「無」の時は「有があつて無がある」と感じました。これは「有がなければ無も生じない」ということになります。ですが、僕はその「有も無も生じない世界」が今月号の「空」だと考えはじめました。僕は、自分の細胞ひとつひとつが日々生まれ変わり心が日々変化していくなかで、「僕が僕でありつづけているのだろうか」と思いはじめたのです。また、「はじめから、僕自身は存在しているのだろうか」とも考えました。

しかし、どんなに考えても、いえ、考えれば考える程、解らなくなってしまいます。考えて、考えて、考えても解らないのであきらめる。するとはじめから考えないのと同じでした。

そう考えている内に、頭に鳥が止まってしまうのが、気にしていない顔を「空」とする文字「心象書道」が自然にできました。

(ながい けんさく)

昭和20年群馬生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

春彼岸会

法
話

羽田恵三

「毎年よ彼岸の入に寒いのは」(子規)

この句の前書きに、「母の詞自らの句となりて」とあります。彼岸が来たというのにまたまた冷え込む日があつたのでしょうか、「もうお彼岸だというのにいつまでも寒いね」というと、お母さんが「毎年よ彼岸の入りに寒いのは」とお答えになつた。子規は母のその言葉がそのまま俳句になつていることに気づき、それを俳句に残したものと伝えられています。彼岸の入りの雰囲気がよく味わえる句だと思ひます。

いつの世も、母の偉大さには変わりがないようであります。俳匠子規にも、母は永遠の師匠として憧れもし、お慕いなさつたことではありません。

この世の母もそのとおりであります。お釈迦さまは、一切衆生に母があると説かれ、その母のましますところを彼岸、彼の岸と示されました。彼の岸があれば必ずこちら岸があります。そこを、迷い子である私たちの日

暮しのすがたをたとえて此岸とお示しになりました。

此岸に、苦しみ悩む迷い子のこの私に、慈愛のまなざしをふり向けて、案じてくださる真の母がまします処こそ、わが人生の最大目的地であり、ここを彼岸、み仏の国、お悟りの世界と教えられたのであります。

この世の母の如くに憧れもし、お慕ひ申しあげるみ仏のまします彼岸に到るについては、代表的な修行が六つ説かれています。

彼岸のことを、インドの言葉で「パーラム」と申します。「パーラム」へ到る六つの修行ということで、これを「六波羅蜜」の行と申します。

「布施」(ほどこし)・「持戒」(きまりを守る)・「忍辱」(辱めを堪忍ぶ)・「精進」(つとめに励む)・「禪定」(心を定める)・「智慧」(ものの道理をみきわめる)

これを、六つの彼岸に渡る修行というところから「六度」の行とも申します。

いずれに致しましても、この「六度満行」叶

うなら「到彼岸」仏の日暮しが約束されるのであります。

諸々の菩薩方は、この「六度」を満行して彼岸に渡り仏となつて行かれたのであります。が、私たち凡夫にとりましてはなかなか難しいことでもあります。

ひとことで解説しますとそんなに困難なことには思えません。いかがでしょう。いま「布施」ひとつを例にとつてみましょう。

「布施」とは、他に施しをするということですが、「そのくらは常のこと」とお考えのことでしょう。なるほど、物を差し上げたり頂いたり常の生活の中で行うことであります。しかし、それが「布施」と言えるかという点と難しいものがあります。

「昨年子供の入学で、ご近所にお赤飯をお配りしました。今年はお隣が入学のはず、なのお赤飯が……。」と云いませんか。

あるいは、歩道橋の階段で老婆さんの重いカバンを持つてあげました。渡り終えて一言

のお礼があれば「一件落着」であります。もしそれがなかったら如何でしょう。一言のお礼欲しさで持ったカバンではないけれど、なにか「複雑な思い」が残りませんか。

「布施」には、「三輪清浄」、「三輪空」と説かれました。施者・受者・施物、この三つが不浄では「布施」になりません。また施物にいつまでも拘っていたら、「空」とは申せません。そうなるとなかなか難しいことあります。口で、態度でごまかし繕ひは致しますが、果たして心の中は如何でしょうか。

「わが心鏡に映るものならば

さぞや姿の醜かるらん」

お恥かしい限りでございます。とても彼岸へ渡ることできる私ではございません。

この事を身近に教えて残してくださったのが、あのお棺の中に入れる「六文銭」であります。「死んだら向こうに「三途川」（三途の川）があるからその時にはこのお金で渡してもらいなさい。」と六文のお金を入れて野辺

の送りをいたします。

その「三途川」とは、三つの煩惱の川であります。三途は、地獄と餓鬼と畜生の迷いの世界であります。そこへ落ち込む原因は何で造るか。それは貪り・腹立ち・愚かさ・つまり「貪瞋痴」三毒の煩惱であります。

ですから「三途川」は、死んだ後に渡るのではなく、今日ただ今渡る川であります。

本来ならば、「六文銭」はお棺の中に入れるのではなく、生まれた赤ん坊に持たすものでありましょう。東海地方の一部では、こどもの出産祝に「六文銭」を添える聞き、これこそ教えに叶った風習だと感心したことがあります。

その煩惱というものは、なかなか根深い、厄介なものでありまして簡単に掃除のできるものではありません。学問教養、あるいは修行の力でも無くせるものではありません。無くすことが出来ないならば、これを少しでも和らげて、これを持ち越えて日暮しでき

ないものかと、貪りに対しては、「布施」を説き、先に自分から出すことによつて貪りを押さえていくことができる教え、腹立ちには「忍辱」を、愚痴（無明）には「智慧」と、お釈迦さまはここに六つの修行を説かれたのであります。

これを昔の方は、越すに越せない「三途川」を六つの修行、六文銭で越して行けと教えられたのであります。それがいつしか修行が忘れられて、六文銭だけが残ったものでありましょう。

彼岸へ渡る尊い六つの修行ではあります。が、法然上人は、凡夫であるわが身に深く思いを致されて、「六度満行」の覚束ない凡夫の我が身が間違ひなく彼岸に渡らせていただく道はないものかとご苦労下さったのであります。

比叡山黒谷報恩蔵において、お釈迦さまの教え「一切経」（五千七百余巻）聞き見給うこと五度といわれます。

そしてついに、承安五年（一一七五）春弥生、善導大師の『観経疏』の導きによつて尊くも弥陀の本願にお出あい下されて、凡夫の私どもがたやすく彼岸に渡れる道をお示し下さつたのであります。

法然上人は、「一切経」を大きく二つに整理され、一つには聖のための教え（聖道門）、二つには凡夫のための教え（浄土門）と分けてお受け取りになりました。

聖道門の教えには、様々の修行が説かれ、結論的には、自力でもつて「六度満行」して仏となつていくことを勧められている。しかし、我が身を深く眺めてみるならば、とてもその道に堪える我が身ではない、「戒においては一戒をもちえず。禪定においては、わが心動じやすく一心静まりがたし。智慧においては、まさに愚鈍の我が身。」その道以外に教えはないものかと、苦しみ悩みのどん底から、「一切経」に求め求め、探し探してみた時に、ありがたくも尊くも「浄土三部経」の

み教えに、

法蔵菩薩と言われる尊い比丘が、一切の衆生を救わんと、五劫に思いを凝らし四十八の誓願をおこされ、兆歳永劫の間修行に明け暮れ、ついに「六度満行」し、西方極樂浄土を構え、その土の教主阿弥陀仏となられすでに十劫の時間が経つていと説かれてゐる。

そして四十八願のなか、第十八願に

「設我得仏十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺。云々」

（もし私が、仏となつたならば、皆さん方、私の国に生まれたいと心から願ひお念仏申すお方が、生まれることがなかつたら、私は仏になりません。）

とお誓いになられ、しかも十劫の昔に成仏なさつておられる。と言うことは、この誓願は全部成就したということであります。

わが身には到底「六度満行」の望みはないけれど、口にお念仏申すことはできる。これよりほかに私の彼岸への道はないと、法然

上人は、浄土門を選ばれて、四生の悲母なる阿弥陀様のお待ち下さる極楽浄土を彼岸と願ひ、お慕いなされたのであります。

「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に生まるることを示さんがためなり。」

南無阿弥陀仏のお念仏で彼岸に渡ることのできる確信を、世に明かにされたのであります。

そしてその六字の名号（南無阿弥陀仏）の中には、四智・三身・十力・四無畏といった阿弥陀様の内なる功德（内証の功德）、また相好・光明・説法・利生という外に働き出してくださるお力（外用の功德）の一切が摂在せり、すべておさまっているとお示しであります（『選択集』）。

また、「万善の妙体は名号の六字に即し、恒沙の功德は称名の一行にそなう」とも示されました。

聖の道、「六度満行」はとても望めない我が身ではあるけれど、法然上人のみ教えのと

おり、煩惱の「三途の川」はいかに激しくおころうとも、「南無阿弥陀仏」と仏にまかせ極楽浄土、彼岸をめざして参りたいものであります。

私たち凡夫の「六文銭」は「南無阿弥陀仏」六字の名号と心得てお念仏に励ませていただきますように。

「二河白道 一念一步 到彼岸（牛畝）」

目に入つた者も、目に入らなかつた者も、
遠くにいる者も、近くにいる者も、もう
生まれてゐる者も、これから生まれてこ
うという者も、生きとし生けるすべて
の者はみな幸せであれ。

(釈尊『ダンマパダ』第二四七偈)

かみ雪と白い杖

日本海から新潟を越えて長野に降る雪は、山を越えてくる間に水分を落としてしまい、たいがい粉雪になる。しかし、太平洋沿いから関東平野を越えてくる雪は、水分を含んだままの重たい牡丹雪である。長野では、それを「かみ雪」という。多分、上雪と書くのだろう。江戸や京といった「上」からやって来る雪だから、と私は解釈している。

一月二十三日、所用先から長野に戻った日もかみ雪だった。

長野駅の改札からコンコースに出ると、雪は靴底が埋まるほどに積もっていて、バス乗り場へと下りる階段の前に雪だまりができていた。粉雪ならキュッキュと踏みしめて歩くこともできるが、べたついた雪では歩きにくい。傘もないし、歩かずに、バスで帰ることにした。バス乗り場までは仕方がない、濡れるに任せよう。

そうあきらめて歩き出すと、初老のご婦人が雪だまりに向かって不自然に歩いていった。白い杖を持っている。目が不自由でおられるのだ。

「まっすぐ行くと、雪だまりですよ。どちらへ行かれますか」

声をかけると、自宅に帰るのでタクシーに乗りたいたいという。いつもなら杖で点字ブロックを確認しながら歩けるのだけれども、今日は雪で覆われていて確認ができず、うろうろしてしまったのだそうだ。

タクシー乗り場に行くには、地上階のコンコースから階段を降りなければならぬ。先年、ハンディーキャップ体験の研修会に参加したおり、目隠しして階段を降りた。介護者に手を引いてもらっても恐怖感はぬぐえないものだった。まして、今日は階段にも雪が積もっている。

がらにもなく「手を引いて差し上げましょう」と言って、階段を下ることにした。降りながら「この階段も、融雪機能が付いているんですけど、今日の雪は融けてもベタベタするだけですわね」とおっしゃるので、「かみ雪ですから」と答えたが、この階段の内部に融雪パイプが巡らせてあることをはじめて知った。

駅前広場はさらに雪が積もっていた。点字ブロックは見る影もなく、一部は圧雪となってまことに歩きにくい。ようやくの思いでタクシー乗り場に着き、そこで別れようとしたが、ご婦人を乗せるタクシーが停車位置より四、五十センチ

チ先にずれて停まってしまった。ご婦人がタクシーのドアが開いても、その位置がわからなくなっていた。結局、また手を引き乗車を見届けた。

「ああ、いいことした」というわけではない。どこか違う感覚なのだ。じつは昨秋、大切な肉親を失った。思いもよらぬ急逝、駆けつけたときには不帰の客になっていた。すでに納骨もすませたが、どこかまだ、体の中に言い表せぬ虚しさ、切なさがかすぶっている。一人になると無性に寂しい。

だから、その寂しさだか、悲しさだとかをどこか無意識のうちに癒そうとしているのだろう。ご婦人の手を引いたのも、本能的だったように思える。もしかしたら人は、他人に優しくしなければ悲しみに押し潰されてしまう生き物なのかかもしれない。私は、人に優しく振る舞える機会を待ち望んでいたのだ。

幸せであれ。お釈迦さまは縁があるうとなかろうと、生きとし生けるものすべての幸福を祈れと教えてくださった。大切な教えだけれども当たり前の教え、これまではそのくらいに思っていた。しかし今は違う。人の悲しみを知り抜いて、はじめて言える言葉だと思うのだ。

（浄土宗総合研究所 柚山榮輝）

健康に人生を送る

十力条・長田流

10・早寝早起き・毎朝三〇分の散歩・五分間の体操
(睡眠は四〜五時間で可)

この項は誰が考えても当然のことですので多くは申しません。わたしがこれを実感した動機にだけふれておきます。海上自衛隊時代、起床直後の五分間体操で一日がはじまりました。それがわたしの生活習慣として現在もつづいています。三〇分ほどのジョギングで心地よい汗を流してから朝風呂を浴びます。年齢を重ねるごとにジョギングが速歩の散歩に変わりました。これをつづけることで健康な人生をまっとうしたいものです。

早寝早起きについてインドでは、古来より午後

(財)自然農法国際研究開発センター 研究員

長田英樹



十時から午前二時までの四時間を「ヒッタの時間・万物が寝る時間」と定めているという話を聞いたのが、平成二年のことです。おおむね午前二時を就寝時間としていたそれまでの生活習慣をあらためて、それ以来、基本的に午後十時就寝、午前四時起床にしました。もちろん仕事の関係で毎日ではできませんが、可能なかぎり早寝には留意しています。同じ五〜六時間の睡眠時間でも体調がちがうことに気づきました。充足感、スッキリ感がまったく違います。

自然農法の創始者は、農薬や化学肥料、そして医薬品について「薬禍被害」を訴えつづけてきました。「薬

品が新たな病気をつくる」という説です。

創始者没後、新たに化学物質である食品添加物が登場して食品業界を大きく変えたことは第二条で述べました。この変化が進歩か退歩かの論議は別にして、新たな病気が生まれてきたことは注目すべきです。ガンを筆頭に糖尿病、痛風、心臓疾患その他、かつては西洋にのみ発生するはずだった病気が、年を追うごとにわが国に多発してきたのです。もちろん食品添加物にのみ起因するものではなく、医薬や農薬と連動していると考えるのが自然です。創始者の説にあてはめたととき薬品類の過剰摂取が最大原因だと考えます。

厚生省はこれらの病を「成人病」と呼ばせました。医学者たちにとっては大変な時代だったようです。それは結核を筆頭とする「貧しいがゆえの病」を克服しつつあった時代から、一挙に「富めるがゆえに起きる病」への対応を迫られたからです。

私にこの話をしてくれた医学者は「成人病は贅沢病だ」と力説していました。この贅沢という言葉は「肉を食べすぎる」に置き換えてもいいようです。

その成人病も「生活習慣病」と呼ばれるようになりますが、わたしはしつこいほど「食源病」と呼ぶべきだと主張しています。その根源は化学物質である薬です。食品添加物はもとより、食肉や養殖魚の餌に混入された抗生物質やホルモン剤などの薬品が口から入ってくるのです。

健康に生きるという大目標をにかけているわたしは、還暦を過ぎてもなおカゼ薬一服飲んでいない「無医薬」人間です。食事は米も野菜も自然農法産にこだわり、調味料は無添加のもの、肉食を最小限にして魚は光もの、早寝早起きで笑いすぎるくらい笑う、こんな生活にこだわっています。「人間の内臓は栄養の製造工場」という、創始者の説を根幹においているのです。自画自賛のようで恐縮ですが、わたしのような生活者をふやすことが健康人あふれる社会づくりに結びつくものと信じています。

「国民総医療費がふえつづけるかぎり国家が破産への道を歩んでいることを自覚してほしい」これがわたしの叫びです。

ありがとうございました。

民話
をたずねて

連載

赤い苺と黒い苺

石崎敬子



© ISHI
KI KAWA

絵 石川忠夫

むかしあるところに、母親とお千代とお花という姉妹があつた。妹のお花は母親の本当の子で、姉のお千代はままつ子であつた。母親はいつもお花だけを可愛がり、お千代にはきつい仕事ばかりさせておつた。けれど、お千代はいやな顔ひとつせず、まめまめしくよく働いておつた。

ある年の冬のこと。雪がちらちら降り続く寒い日、母親と炬燵に当たつていたお花が何を思ったか、

「かかさん、赤い苺が食べたい。苺がほしいよお」

と言いだした。さすがの母親もあきれて、

「なんだって。この寒いのに苺など、どこを探したつてあるもんか」と言つて、知らん顔しておつた。けれど、お花は諦めん。

「やだやだ、おらあ苺が食べたいよお」

仰向けに寝転がり、足をばたつかせ、しまいにはわあわあと泣き出した。これには母親も困り果て、台所の隅で働いているお千代を呼びつけた。

「お千代、お花が苺が食いたいと泣いておるのがわからんのか。さっ

さと山へ行つて、赤い苺の実を採つて来い。この籠いっぱいになるまでは家には帰つてくるな」

そう言うとお母親はお千代に籠を押しつけ、早く探してこいと、家の外へ追い出した。こんな雪の中に、苺があるはずはない、かかさん、許して、とお千代は戸を叩きながら言ったが、家の中からうんともすんとも返事はなかった。

お千代は仕方なく、籠を抱えて、寒い雪の中を足袋もはかず、素足に草履のまま山に向かつて歩き出した。あたりは雪が深く積もり、どこもかしこも真っ白であった。雪道を歩くと、ずぼっずぼっと足が雪の中に入り込み、思うように進まん。やつとの思いで山に登り、あちこちの雪をかき分け探し回ったが、苺が見つかるわけではない。そのうちお千代の身体は氷のように冷たくなり、手足が千切れるほど痛くなってきた。疲れ切つてもうこれ以上は、進むことも戻ることもできん。その場にうずくまるお千代の小さな頭にも痩せた肩にも、雪がうっすらと降り積もつていった。

「おらあ、ここで死ぬのか」

つらくて悲しくて、お千代の目から涙があふれ出した。凍えた両手で顔を覆い、泣きじやくっておると、耳元で誰やらの声がする。

「これ、これ」

はっと顔を上げると、そこには真つ白い髭を長く垂らした爺さまが、杖をついて雪の中に立っておる。

「こんなところで何しておる」

「はい、苺を探しております」

お千代はこれこれ、こんな訳でと一部始終を話した。

「なんと無理なことを言う母娘じゃ。だが、心配はいらん。わしが苺のなっている所へ連れて行ってやるから」

と、爺さまはお千代の肩にそつと手をおいた。するとどうじゃ、不思議なことに、お千代の凍った身体はほつかりと暖まって、腹の中から力が湧いてきた。足元も軽くなり、爺さまの後ろをついて行くと、谷間に出た。そこは雪が消え、暖かい陽射しがまぶしく、草木が青々と茂っていた。

「ほれ、そこじゃ」

民話

をたずねて



爺さまが指さす草むらを見ると、その中には真っ赤に熟したうまそうな苺がたんとなつてゐる。

「さあ、たくさん採つてお帰り」

「苺じゃ、苺じゃ」

と、お千代は草むらに駆け寄り、夢中になつて苺を摘み、籠に入れた。苺はすぐに籠いっぱいになった。

「おうおう、良かったな。はよう家に戻れ。気をつけてな」

お千代は爺さまに何度も頭を下げ、来た道を急いで帰つていった。家に戻ると、籠いっぱい苺の実を母親とお花に、はい、と差し出した。こんな雪の中に苺があるわけがない、母親は眉をひそめ、お千代を見やつたが、お花は、

「おお、苺じゃ」

と言うが早いか、ぱいと苺を口の中に放り込んだ。

「うまいっ。かかさんも食べてみる」

どれどれ、と母親も一粒口に入れてみた。ほつぺたがおちるほど甘くてうまい。こんな苺は食べたことがないと、二人してみるみる

うちに食べ尽くし、お千代には一粒もくれなんだ。

「まだ食べたい、もっと食べたい。今度は黒い苺が食べたい」
と、お花は空っぽの籠をお千代の足下に投げつけ、わめいた。

「お千代、もういっぺん採ってこよう」

母親はお千代の背中をどんと突き、家の外に追い出した。

黒い実の苺なんてあるはずがない、今度はばかりは無理な言いつけじゃ、と戸の外で叫んだが、家の中から返事はない。お千代は仕方なく、また雪の中を先ほどの所まで行った。すると、白髭の爺さまがどこからともなく現れた。お千代は爺さまにこれこれ、こういう訳と話すと、爺さまは、心配はいらん、と歩き出した。お千代が黙ってついて行くと、今度は真っ黒な苺の実がつやつやとなっておる。

籠いっぱい黒い苺を採って戻ると、今度も一粒もくれずに母娘は皆食べてしまった。すると、母娘はにわかに苦しみだし、なにやらわめきながら、家を飛び出していつてしまった。そして二度と戻ってはこなかった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。



ネット俳句

の

楽しみ

村田 恭子

専業主婦である私がインターネット上で俳句を作る楽しみと出会ったのは、俳句を初めて半年ほど経った去年の五月頃、ある俳句サイトの投句掲示板を訪れたときでした。

インターネットはすでに何年か経験済みだったとはいえ、俳句ではまったくの初心者、俳句

サイトを訪問するのもまったく初めての体験です。おずおずと「はじめまして」を書き込んだ日、みなさんがいつせいに「いらっしやいませ」「ゆっくり楽しんで」とあたたかく迎えてくださったときには、心からホッとしつつ、少し面映いような気持ちにもなったものでした。しかしこの掲示板の、肩ひじを張らないですみ、投句にちよつとしたアドバースをいただけるという明るく開放的な雰囲気は馴染むうち、私は、あつという間にネット俳句の世界に夢中になってしまいました。

インターネットと俳句。一見遠いもののように思えますが、このふたつ、意外と相性が良いようです。

インターネットといいますが、とかく、顔の見えない匿名性の冷たさや、逆に対話相手への距離感を見失って起こる主婦の不倫、若者の心中事件などが取りざたされますが、俳句はもともと俳号という匿名を使ったり、作者名を伏せて選句を行ったりする大人のための「座」の遊びです。毎日少しずつの時間をネット上に作ら

れた「座」で過ごすうちに、次第に共通の趣味を持つ人々への節度をわきまえた親近感、連帯感が生まれてきます。いってみれば、お茶を飲む代わりに和気あいあいと俳句を詠む、顔の見えないお茶会、といったおもむきなのです。

私が最初に訪れたそのサイトは、ある俳句結社の主催しているホームページの投句掲示板でした。ここでは、毎日ひとつかふたつの題が提出され、結社以外の人でも自由に出入りして、好きなときに何句でも、題詠を掲示板に書き込める、という形で運営されていました。

投句のかたわら書き込まれるみなさんのコメント——時候の挨拶や、ちょっとした世間話や、あるいは言葉に対する感覚の違い——から、いろんな地域の、いろんな仕事を持った、いろんな年代の人々が集まっていることが分かります。このような世代を越えた交流の場は、日常生活の中ではなかなか持つことのできないものだけに、たんなる俳句の楽しみを超越した、貴重な体験といえるでしょう。

またこのサイトでは、投稿するだけでなく、一週間に一度みなさんの投句をまとめて掲示し、

参加者おのおのが選句もします。このように、自宅にいながらにして多くの人々の数多くの句に親しく接し、学ぶことができるのも、ネット俳句の良いところです。

このホームページで知り合った方々を通じて、私のネット俳句体験はさらに広がっていき

した。
ネット上には、俳句結社や同人誌主催のサイトだけではなく、個人によって運営されている俳句サイトがたくさんあります。そうしたサイトではさまざまな工夫が凝らされ、ひとつひとつがそれぞれに活気に満ちた場となっています。

私がよく訪問するサイトのひとつ「俳諧俳句浮御堂」では、「しりとり俳句」という試みが展開されています。前の句の下五文字を受け継ぎ、今度はそれを上五文字として俳句を詠んでいくのです。例を上げてみましょう。

懷手小銭三枚持て余す

持て余す猿の腰かけ妻にやる

勝之

裕



妻をやる年に一度のテロリズム 天気
テロリズム日記燃やして芋を焼く 紫野

このような形でリレーしていくのです。詠む人によって、句の中の景色や世界が次々と変わっていきます。毎日何人もの方々が訪れて途切れることなくしりとりは続き、この「しりとり俳句」はわずか四ヶ月あまりで、なんと千句を突破しました。

また、人名を詠み込んで俳句を作るという揭示板を持つサイトに、「なむネット」があります。ここでは、例えば「ルで始まる人名」というように折々でテーマを設定し、その縛りに添って、一句の中に最低ひとりとは人名を詠み込んでいきます。例えば――。

外つ国の東風知る大使ライシャワー 東人
大寒快晴ジャン・ポール・ベルモンド
逃げる逃げる 亜子

人名そのものや、その人物を取り巻く背景への興味も相まって、毎日相当数の句が書き込ま

れ、この揭示板も大変活況を呈しています。

もうひとつ、「俳句コスモス」というサイトでは、週替わりで当用漢字の名から三文字を選び、この三文字をすべて一句の中に詠み込むという珍しい題詠が行われています。一文字、あるいはひとつの言葉を詠み込むというのが通常の題詠ですが、三文字をすべて詠み込むというのはかなり大変です。例えば、「貝・音・火」の三文字が提示された週から、私が好きな句を拾ってみますと――。

しじみ貝無音の小火を見てあたり 振り子
貝温み火宅の人を音読す なむ

三文字がすべてが自然に織り込まれていて、感服します。

このほかに、インターネットという通信方法がもつとも効果的に利用されている遊びとしては、連句が挙げられます。

ご存じの方もあると思いますが、「五七五」で詠む長句、「七七」で詠む短句を交互に付けていき、三十六句で完結するのが「歌仙」と呼

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替0018012145231

ばれる連句です。本来ならば、参加者たちがどこか一ヶ所に集まらないうと実現しないという類のものですが、インターネット上の掲示板を場とすることによって、すべての参加者が自宅や出先から、しかも時間に縛られることなくアクセスできるようになり、何日もかかって歌仙を完成するという離れ業が可能になりました。

歌仙は、『なむネット』や『俳諧俳句浮御堂』でも常時催されています。

このように、実際の句会では行うことのむずかしい俳句の遊びが、インターネット上のあちこちで展開されています。しかもそこでは、俳句を楽しむだけではなく、さまざまな世代の人々による和やかな交流が行われているのです。

俳句は、インターネットという道具立てを得たことによって、新しいあり方を見出したといえるでしょう。

浄土誌上句会

●文字

〔特選〕

春寒しまった文字化けという不思議

永野 司郎

コンピュータ社会は、新しい語を次々生んだが、「文字化け」もその一つで、送受信の際に何かの影響で、別のコードに変わってしまうことらしい。という説明も余分なくらい、今は不思議な世の中なのだろう。

〔佳作〕

心経の一字太く筆始め

河合富美枝

人文字の崩れ雨来る初試合

石原 新

寿の一字入れて賀状書く

浜口 佳春

●線

〔特選〕

線香の白き燃え殻寒に入る

周東 澄枝

線香が燃えてゆくにつれて、白い灰が伸びてついにはほとりと落ちる。その落ちる前か後かは言っていないが、目のつけどころは面

白い。ただ「燃え殻」は少し荒っぽい表現ではあるが。

〈佳作〉

電線を占領したる百舌の群れ

佐藤 雅子

路線守る駅員総出雪深し

細田 初枝

廃線路いま通学路田芹摘む

嶋田喜代子

●自由題

〈特選〉

寝る程になき風邪の身をもて余す

寺下 忠至

寝るほどでもないが何かするのはつらいという、こういう時が一番始末に負えないものである。家に閉じこもって何するでもないという、手持ちぶさたでいる様子が、目に見えてくるようだ。

〈佳作〉

生姜湯を吹きて湿りし長寿眉

桐部 千秋

初春や十の掟の数え唄

片桐てい女

竹箒すくむ落ち葉を振り落とす

坂倉左武朗



参加作品.....編集部選

文字

おめでどうの文字に年のしめくくり

今井 恵子

横文字のメール届くや年の暮

佐藤 雅子

顔見世や勘亭流の文字見上ぐ

桐部 千秋

文字小さき本読む炬燵に拡大鏡

山本美代子

懐かしき文字は二の二の雪の朝

堀 菅子

サツカーの人文書の波風の中

金谷 友江

顔見世や勘亭流の文字看板

周東 澄江

湯豆腐やメニューの文字のかすみをり

中島富士子

生きている証逆手の曲がり文字

中島 一子

まん中に筆文字添えて賀状書く

嶋田喜代子

朱で囲む文字も春の旅プラン

片桐てい女

日展の気品ある文字に佇ちふたり

細田 初枝

扁額の不立文字や初明り

大場 清

犬注意文字に冷やりと風当る

加藤 政男

封筒の文字判じいる鵬の昼

増田 信子

絵手紙にそえる一文字冬麗ら

山口 信子

伝言板文字それぞれに夕寒し

石原 新

文字入りの手拭腰に大根引く

谷 しげ子

自由題

玉砂利に称宜ゆきの沓くつ滲む冬の雨

園田 郁子

木の葉髪ひろいて捨てし朝の床

三ツ橋仁平

竹簾しだすくむ落ち葉を振り落とす

坂倉左武朗

格子戸の古き家消ゆ冬の町

西井 正

坪庭の鉢の置き替え冬構え

東 保

枯れゆくに風音容るる樹の森

池田 伊吹

立ち話しほのかに香る茶花かな

小林 恵美

かき寄せて木端微塵の落ち葉かな

中村よみ子

冬菊にうずもりて母柩中

北川 弘子

小春日の数字が弾む万歩計

島谷ときを

母のため供養ひとすじ生きる我

飯島 英徳

浄土詩上句会の お知らせ

題

◎季語ではありません

玄関

料理

自由題

締切・三月二十日
発表・『浄土』二〇〇三年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

極楽

「ごくらく」、皆さんはどんな時に使われるでしょうか？
温泉につかりながら一杯の時、それとも美味しいおまんじゅうを口にした時？
浄土教では、この極楽の前に西方を、後に浄土をつけて「西方極楽浄土」とよび、阿弥陀さまの世界を意味します。「阿弥陀経」というお経には、現在も阿弥陀さまが説法をされていて、また俱会一処とい、この世界で再び会うことのできる世界と、説かれています。

先に旅立たれた方々と再び会える場所なのです。



編集後記

囁りの声にて起きる夢を観る 俗潤

今年から「国連識字十年」が始まる。九十年からの「国際識字十年」に続くものだ。識字運動の重要さと、成果がのびない証であろう。九十八年の報告では、アジアでは、十五歳以上の成人の非識字率は六億三千八百万人を数え、人口の二九%にもなる。アフリカではなんと人口の四三・六%にも上り、一億六千六百万人を越える。北アメリカでさえ一千五百万人を数え、一五・八%である。自国語の読み書きが自由に出来ない悲しみ、苦しみは、想像を絶することと言わざるを得ない。

日本において識字運動は、水平社運動と共に始まり、戦後部落解放同盟を

中心に進められてきた。これは不就学や小学校中退者が被差別部落の人々が全国平均の二十倍にも達していたからである。現在識字学級に通う人々は、女性と高齢者がその大半を占める。大阪のある学級では八二%が女性であり、四八%が六十歳以上であった。女性差別の歴史が物語っている。

先年日本の高官が、日本では識字率、読み書きの出来る人が九七・八%にも上る。つまりおおよそ一〇〇%であると自慢げに講演した。しかし未だ二・二%の方は非識字者である。この事実を我々は見逃すことは出来ない。どんな少数者でも忘れないこと、それが今、宗教者に求められている。(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川俗潤

斎藤晃道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了暗

浄土

六十九巻一・三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年二月二十日
発行 平成十五年三月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーディー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明開会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八 六九四七

FAX 〇三・三五七八 七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二一八七

New & Used Cars
Takata & Co., Ltd.
SINCE 1965

あなたの一台を世界から

ベンツ・ボルシエ・

フェラーリ・ロールスロイス・

国内の各ディーラーにも

在庫の無い車種でも

世界中から輸入しお届け致します。



最新在庫情報をご覧になれます。

<http://www.takataco.jp>
E-mail: union@takataco.jp

UNION

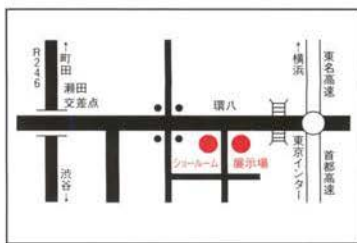
輸入元(外国自動車輸入協同組合員)

株式会社 高田商會

東京都世田谷区玉川台2-12-1 (〒158-0096)

営業時間：平日／9:30～20:00 日祝／10:00～18:00
定休日／年中無休

☎03-3708-1911 FAX.03-3708-2066



東名用買インター瀬田交差点にむかってすぐそば

大本山増上寺蔵・残欠二巻本〈重文〉

法然上人絵伝が 絵葉書になった!!



1 セット 8 枚組
 美装封筒入り
 定価 :800 円
 (本体 + 税)
 送料別



菩提寺修学の図・牛車
 母子の別れと旅立ちの図
 菩提寺修学の図・講義
 叡山入室の図
 後白河法皇に御談義の図
 道俗教化の図(立教開宗)
 善導和尚来現を拝写せしむる図
 阿弥陀三尊影現の図

お申込みは下記まで

発行 = 法然上人鑽仰会

東京都港区芝公園 4-7-4
 明照会館内 〒105-0011
 電話 /03-3578-6947
 FAX/03-3578-7036
 振替 /00180-8-82187

上の絵葉書は実物と多少異なります。